

## 「厭離穢土」の訓み

——「オンリエド」は歴史的に根拠のない訓みである——

西田直敏

### 一 問題

「厭離穢土 欣求浄土」、この有名な浄土教の教化の詞は、天台宗の源信僧都が寛和元年（九八五）に著わした『往生要集』の「大文第一 厭離穢土」「大文第二 欣求浄土」に由来する。この「厭離穢土 欣求浄土」をどう訓むか。現在、入手しやすいテキストとして、岩波文庫『往生要集』（石田瑞磨 日本思想大系『源信』〈岩波書店〉を底本とする）

がある。この訓みは、  
一には厭離穢土 二には欣求浄土  
となっている。

「厭離穢土」を「オンリエド」と訓むことは、たとえば、高橋貞一『新校太平記上』（思文閣 一九七六年）「卷二十 義貞首獄門に懸くる事 付勾当内侍の事」の本文に「厭離穢土」（623ページ）とあるが、「正誤表」に「厭離穢土」を「誤」とし、「正」は「厭離穢土」としているように、常識化されているかに見える。

「厭離穢土」にルビをつけて「厭離穢土」としている文章もよく目にする。

例

「厭離」を「オンリ」と訓むことも、岩波文庫『法華経下』  
「随喜功德品第十八」

汝等威応当 疾生厭離心 汝等よ、威く応当に、疾く

厭離の心を生ずべし(84ページ)

岩波文庫『吾妻鏡三』建久六年八月十日条

先ず穢土を厭離し、浄土を欣求する旨趣を申す(168ページ)

日本古典文学全集『万葉集二』(小学館)

従来 この穢土を厭離せり

(巻五794山上憶良日本挽歌の序)

など、少なくない。

このように見てくると、素直に「厭離穢土」を「えんりえど」と訓むよりも、「おんりえど」と訓む方が、由緒ありげであり、学問的で権威ありげに見える。

しかしながら、近年、『往生要集』の訓読の歴史に関心を持って、調べていると、江戸時代までの漢文で書かれた『往生要集』の写本、版本類には訓点や送り仮名、時に読み仮名がつけられているが、「厭離穢土」に読み仮名をつけたものはない。

が、漢文を訓み下しにして、漢字カタカナ文または漢字ひらがな文にしたものには、漢字に読みがなを付したものがあり、それは悉く、「厭離穢土」と訓まれていて、「おんりえど」と訓まれたものは皆無であることが明らかになった。

即ち、その最古の確実な例は、

此抄者、江州栗本郡安養寺釋淨性依所望書写畢

于時享徳三年<sup>(一四五四)</sup>丙卯月十七日

の奥書を持つ滋賀県明性寺蔵『往生要集』一二冊(二冊欠現存十冊)、函書きに「蓮師御筆」とあつて、真宗中興の祖蓮如上人筆と伝える漢字カタカナ書き下し文で漢字の殆どにカタカナで訓みが付されている(参照、拙稿「明性寺本仮名書き『往生要集』について」甲南国文第号 一九九六年三月、『明性寺本仮名書き往生要集』を中心とする往生要集訓読史の国語学的研究)平成6・7年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書 一九九六年)

ヒトツニハ厭離穢土フタツニハ欣求浄土大文第一二厭離穢土トイフハ……ソレ三界ハヤスキトナシ モトモ厭離スヘシ

(明性寺本 一)

〔注〕以下、原表記「厭」とあるものも印刷上「厭」とする。

江戸時代には、庶民向けの仮名書き絵入りの『往生要集』が  
数多く出版されたが、そのいずれもが「厭離穢土」を「えんり  
えど（えんりえど）」と訓んでいる。また「厭離」は「えんり  
（えんり）」であって、「おんり」「おんりえど」と訓んでいる  
ものは皆無である。

その二、三を示す。

一つには厭離穢土二つには欣求浄土

大文第一厭離穢土の事

それえんりえどといふはけがらはしき土をいとひはなるゝ  
事也

もつともえんりすへきもの也 今そのえんりの相をあかす  
に

（古版『入』 往生要集）

一つには厭離穢土 二つには欣求浄土

大文第一厭離穢土の事

それ厭離穢土といふは……もつとも厭離すべきもの也今そ  
の厭離の相を明すに

（寛文十一年版『入』 往生要集）

一つには厭離穢土二つには欣求浄土

大文第一厭離穢土の事

それ厭離穢土といふは……尤厭離すべき者也 今それ厭  
離の相を明すに

（元禄二年版『入』 往生要集）

以上によって、江戸時代までは、『往生要集』の「厭離穢  
土 欣求浄土」は、「エンリエド ゴングジョウド」と訓まれ  
ていて、現在、岩波文庫本『往生要集』（石田瑞磨訳注）が訓  
んでいるような「オンリエド」という訓みはなかったのである。

「厭離」の語は、『法華経』の「随喜功德品第十八」に「汝  
等威応当 疾生厭離心」の例があつて、最初に示したように、  
岩波文庫『法華経』（坂本幸男・岩本裕訳注）では、「疾く厭離  
の心を生ずべし」と訓んでいる。

『法華経』についても仮名書き本があるので、この箇所につ  
いて調べてみると、次のようになる。

鎌倉時代の妙一記念館蔵『仮名書き法華経』は「厭離の心」  
とあり、

江戸時代中期の佼正図書館蔵『法華経』仮名書き本は「厭離」、  
西米寺蔵『法華経』仮名書き本では「厭離」であつて、全て、  
「エンリ」と訓んでいて、「オンリ」とは訓んでいない。「厭  
字については、室町時代末期の『法花文句難字書』に「厭エンラス」  
とあつて、「オン」の訓みはない。

なお、大島正二『唐代字音の研究』(一九八一年汲古書院)

の「資料」によれば、「厭」は『広韻』の反切では、「於隄」「於琰」「於葉」であり、張守節(八世紀頃の人)『史記正義』音注では「烏減」であつて、奈良、平安時代初めには「エン」として日本に取り入れられたと考えられる。

『古語大辞典』(小学館 一九八三年)の「えんり(厭離)

の【語註】には、次のように説かれている。

「厭」は漢音エン、呉音オン。平安時代は一般的に漢音が用いられたらしく、承暦本最勝王経音義書入・法華経单字・法華経音訓、皆エンとし、西大寺本金光明最勝王経古点の字音注に「依ム反」とあつて、やはりエンと訓んでいる。

〔中野猛〕

右の解説で、「厭」の「呉音オン」とあるが、確かに、これまで「呉音オン」と考えられ、漢和辞典もそのように説いてきたが、最も権威のある辞典と考えられている諸橋徹次『大漢和辞典』を見ると、「厭」の音は、次のようになっている。

□エフ【集韻】益涉切 □エン【集韻】於隄切 □エン【集韻】於琰切 □エン【集韻】於葉切 □エフ【集韻】乙甲切 □エフ【集韻】乙及切 □エフ【集韻】耶感切

「オン」の位置が問題であるが、□の語義は「○おほれる、

◎よあけのほのぐらさ」となっている、諸橋氏は【参考】として、「音韻互に相通じ、一様に論定しがたいものがある。」と記している。

「厭」は、実例においては「厭」と書かれていることが多いが、『大漢和辞典』の「厭」字を見ると、音は、次のようになつてゐる。

□エン【集韻】於隄切 □エン於隄切 □エフ於【玉篇】於甲切 □エフ【集韻】益涉切

ここには「オン」の音がないことが注目される。「厭」字の音符は「厭」であるとすれば、「厭」に呉音「オン」がある筈であるが、無い。呉音の概念にもあまいまいなどところがあるが、簡単に「厭」の呉音は「オン」であると言えないところがある。

最近の漢和辞典である鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』(大修館書店 一九九二年)では、「厭」の音を、□ヨウ(エフ) □オウ(アフ) □ヨウ(エフ) □エン □エン □エン □エフ(イフ) □オウ(オフ)とし、「オン」は□つまり日本における慣用音としている。

従つて、「厭離穢土」「厭離」の訓みとしては、「エンリエド」「エンリ」が歴史的に正しく、現在、通用している「オンリエド」「オンリ」という訓みは、歴史的根拠を持たない近代の訓

みであるというのが、私の結論であるが、「厭離穢土」「厭離」「厭」の訓みについて、なお歴史的に確實な「エンリエド」「エンリ」「エン」の例を提示し、「オンリエド」「オンリ」という訓みがどうして成立し、なぜ広まったのかという現代の漢語の訓みの問題について以下に考えてみたい。

## 二 考察

「厭離穢土」「厭離」のような漢語の場合、漢字で表記されているので、訓み仮名がつけられているか、仮名書きにされていない限り訓みの確實な証拠とはならない。

日本人の手による最古例は、万葉集、巻五の山上憶良が「日本挽歌」の序の最後に記した

愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦結 從來厭離此穢土 本願託生彼淨利の「厭離」である。「從來厭離此穢土 本願託生彼淨利は、思想的には、『往生要集』の「厭離穢土 欣求淨土」と軌を一にするものである。

この「厭離」の訓みを辿ると、日本では古来、漢文に訓み仮名をつけることがなかったので、『校本万葉集』が示すように、

漢文の詞書きには訓みがない。江戸時代まで下って、北村季吟（一六二四—一七〇五）の『万葉拾穂抄』刊本に至って、ようやく訓が示されている。

從來 厭離此穢土

訓は「厭離ス」である。この後、契沖の『万葉代匠記』、鹿持雅澄の『万葉集古義』などは、また、漢文のままに訓みをつけていない。

近代になって、井上通泰『万葉集新考』（国民図書 一九二八年）は「えんり」と訓んでいるが、一九三五年の森本治吉『万葉集総釈第三』（楽浪書院）は「をんり」と訓み、また、一九四二年の佐々木信綱・武田祐吉『定本万葉集』（岩波書店）も「をむり」と訓んでいる。既に示したように一九七二年の小島憲之・木下正俊・佐竹昭広『日本古典文学全集万葉集』（小学館）も「おんり」と訓んでいる。

が、一九五九年の岩波日本古典文学大系『万葉集』（高木市之助・五味智英・大野晋・澤瀉久孝『万葉集注釈』（中央公論社）、一九七八年の新潮日本古典集成『万葉集』（青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎）一九八四年の井村哲夫『万葉集全注巻第五』（有斐閣）、一九九六年の伊藤博『万葉集訳注』（大日本印刷）など現在の殆どの訓みは「えんり」と訓んでいる

る。

万葉集における「厭離」の訓みについて言えば、一時期、「おんり」が有力であったようであるが、現在は正しい「えんり」の訓みになってきていると言える。

次に、高橋貞一氏が『新校太平記』正誤表で、「厭離穢土」の訓みとして「えんりえど」を「誤」とし、「おんりえど」を「正」とした問題について検証してみよう。

『太平記』の諸本の中で、神田本、玄玖本、義御本などは、問題の「厭離穢土ノ心ハ日々ニ進ミ」の「厭離穢土」にふりがなが無い。西源院本は「厭離穢土之心ハ日々ニ進ミ」となっていて「エンリエド」か「オンリエド」かの証明にはならない。が、中京大学図書館蔵『太平記』（長谷川端編 影印 新典社 一九九〇年）は、元和四年（一六一八）、日置孤白軒書写本であるが、問題の箇所<sup>朱</sup>に朱書で訓みがつけられている。即ち

厭離穢土ノ心ハ日々ニ進<sup>ス</sup> 欣求浄土ノ念ハ時々ニ増リケレハ

室町時代に「厭離穢土」が「エンリエド」と訓まれていたことは、既に示した、享徳三年（一四五四）書写の明性寺本『往生要集』の訓みによって明らかであるが、「法然聖人」の弟子

となった熊谷次郎直実、平山武者所が、関東の強者津ノ戸ノ三郎<sup>三郎</sup>が盛を法然のもとへ連れていき、教化を受けさせると、為盛はたちまち腹を切り高声に念仏して前代未聞の大往生をとげたという「為盛発心図録集」（慶應義塾図書館蔵 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第九』角川書店 一九八一年）は、<sup>(一五八)</sup>「天正十一年<sup>一五八三</sup>春<sup>三月</sup>三日来与書之 康楽寺常住」の奥書を持つ。

面々ノ、聖人ノ御弟子ニ、マヒリタマフコトハ、我ヨリ、ハルカ、サキナリ 厭離穢土、欣求浄土ノ、御教訓ヲ、カウフリタマフコトモ度々コソ候ツラメ（121ページ下段）

なお、「厭離穢土」の江戸時代における訓みの例を示すと、寛永三年（一六二六）刊の『東鑑』（<sup>野村</sup>吾妻鏡）寛永版影印汲古書院 一九七六年）の建久六年（一一九五）八月十日条に、鎌倉を出奔し法然上人の弟子となった熊谷次郎直実（蓮生）法師が、源頼朝が上京し、在京した折りには姿を見せず、此の日、はるばるの都から鎌倉に参向した。頼朝の御前に召された直実法師は、「先申スニ厭離穢土ノ欣求浄土ノ旨趣<sup>旨趣</sup>」とある。

『日本国語大辞典』には、浄瑠璃『念仏往生記』の「名所尽し」から「ひとへにゑんりえどとの安心をすすめ」が引かれ、『角川古語大辞典』には、平賀源内の『根無草』（一七六三年刊）前篇三から「厭離穢土 欣求浄土」が引かれている。既に、江

江戸時代の仮名書き絵入り『往生要集』の例にも示したように、「えんりゑど」と表記されている。

江戸時代は、徳川家康以来、將軍家の浄土宗帰依によって、庶民の間にも「厭離穢土 欣求浄土」の信仰が広まった。次の川柳は、それをよく示すものである。

艶里江戸町上品の台也「柳多留 六十七篇七」

（粕谷宏紀編『新編川柳大辞典』東京堂出版 一九九五年による）

これは「艶里」（＝色里、吉原）、「上品」（＝極楽往生に上品・中品・下品それぞれに上生・中生・下生の九段階（九品）がある）「台」（＝極楽往生をとげると極楽の蓮の台の上に生まれる）で、「厭離穢土 欣求浄土」をもじったもの、遊里の吉原へ行けば、遊女によって極楽往生のよろこびが得られる意である。いかに「えんりえど」「こんぐじょうど」が口にされているかを物語っている。「おんりえど」ではなかったのである。

次に、古代から江戸時代までの辞書を検討してみると、「厭離穢土」は掲出されていないが、「厭離」は、次の辞書に見られる。

『類聚名義抄』（十一世紀末頃）

厭 イトフ 厭離キキラフ（仏下本二三七）

『伊呂波字類抄』（鎌倉時代初期）

江の部疊字 厭却 ッ離

『摩芥』（清原宣賢）永正七年（一五一〇）以降

厭離

『易林本節用集』（一五九七年）

厭離

『落葉集』（一五九八年）

厭ア離ニ

『節用集大全』（恵空編 一六八〇年）

厭離

『合類節用集』（若耶三胤子編一六八〇年）

厭離

『書言字考節用集』（榎島昭武編）一七二七年）

厭離

「厭」字そのものは『新撰字鏡』に「央涉反遠也……又作連厭」とある。

「厭離」は、江戸時代まで、すべて「エンリ」と訓まれている。「オンリ」と訓まれたことはない。これは「厭」の音が既

に示したように「エン」(エン)であって、「オン」ではないのであるから当然である。「厭」の訓みだけなら、『字鏡集』に「厭(エン)」「(白河本)」「厭(エム)」「(寛元本)、文明本節用集の「厭却(エンキヤク)」、『倭玉篇』の「厭(エム)」など全て「エン(エム、エン)」である。

さて、次に、明治時代以降、「厭離」「厭離穢土」が、国語辞典でどのように扱われてきたかを見てみよう。

A 「えんり」のみを見出しとして立てるもの、

『官海』(大槻文彦 一八八九年) 用例に「穢土」

『日本大辞書』(山田美妙 一八九二年)

『日本大辞典 ことばの泉』(落合直文 一八九八年) 用

例に「えんり穢土」

『大日本国語辞典』(上田万年・松井簡治 一九一六年)

B 「えんり」「えんりえど」を見出しとして立てるもの。

『大言海』(大槻文彦 一九三五年)

『大辞典』(一九三四年)

『辞海』(金田一京助 一九五二年)

『角川古語大辞典』(一九八二年)

「えんりえど」に「おんりえど」とも読むとする。

『古語林』(林巨樹・安藤千鶴子 一九九七年)

C 「えんり」「えんりえど」と「おんり」を立てるもの。

『広辞苑』(新村出 一九五五年初版)「おんり」はひえんり

『時代別国語辞典 室町時代編』(三屋堂 一九八五年)

おんり→えんり

『大辞林』(松村明 一九九五年) おんり→えんり

これらは全て「おんり」を見出しとして立てているが、「えんり」で解説をしている。

D 「えんり」「えんりえど」と「おんりえど」を立てるもの

『新潮国語辞典(現代語)』(一九六五年)

おんりえど→えんりえど

E 「えんり」「えんりえど」と「おんり」「おんりえど」を立てるもの。

『日本国語大辞典』(小学館 一九七二年)

「おんり」「厭離」に「いやだとして離れること、えんり、」

として、次の例をあげている。

内地雑居未来之夢(坪内逍遙) 一二 個人の愛情を厭離

(オンリ)し

「おんりえど」は「えんりえど」に同じとしている。



国語辞典における扱いを見ると。一九五五年の『広辞苑』以後、「おんり」という訓みを無視することができない情勢にあることが示されている。が、「おんり」を正統な訓みとしていないことは、参照項目として「えんり」を示し、そこで解説していることによって明らかである。次に、漢和辞典における「厭離」「厭離穢土」の訓みについて見てみると、興味のある事実が認められる。

一九一六年刊の服部宇之吉・小柳司氣太『詳解漢和大辞典』は「厭離エンリ」であるが、翌年一九一七年刊の上田萬年・榮田猛猪・岡田正之・飯島忠夫『大辞典』は「厭離オンリ」である。大ベストセラーであった。『大辞典』の影響は極めて大きなものがあつた。一九二三年刊の簡野道明『字源』は「厭離エンリ・オンリ」一九三九年刊の鹽谷温『新字鑑』も「厭離エンリ・オンリ」である。一九五三年刊の小柳司氣太『新修漢和大辞典』では、「厭離エンリ・オンリ」と訓みに「オンリ」を加えている。「オンリ」の訓みの広まりを示すものである。一九五九年刊の貝塚茂樹・藤野岩友・小野忍『角川漢和辞典』は「厭離エンリ・オンリ」とするが、「厭離穢土」には「オンリエド」の訓みのみである。一九六七年刊の長澤規矩也『三省堂新漢和辞典』では、「厭」の音には、エン・ヨウ（エフ）・

オウ（フ）を示し、「オン」はない。が、「厭離」は「オンリ」と「オンリ」を第一にあげ、「穢土」を用例としている。

一九六八年刊の小川環樹・西田太一郎・赤塚忠雄『新字鑑』は、「厭」に㊦ヨウ（エフ）㊧エン㊨エン㊩オウ（アフ）㊪エウ（イフ）㊫アン㊬オン㊭オンの音を示す。㊫の意味は①おほれる。②ほのぐらい。である。そして、「厭離」の訓みに「オンリ」のみを示し、更に熟語とした「穢土」を示している。ここには「エンリ」の訓みが示されていないことが注目される。一九七八年刊の藤堂明保『字研漢和大辞典』は「厭離オンリ・エンリ」「厭離穢土オンリエド・エンリエド」である。

これらの漢和辞典では、『新字鑑』に典型的に示されているように「厭離」を「オンリ」と訓む姿勢が明確に示されている。一九九二年刊の鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』（大修館書店）では、前章で引用したとおり、「厭」は㊰ヨウ（エフ）おさえる。㊱オウ（アフ）㊲ヨウ（エフ）①おさえる②おおう。㊳エン①あきる②いとう③したがう④ふさぐ⑤よい。うるわしい㊴エン厭厭はものの形容㊵エウ（イフ）㊶オウ（オフ）露にうるおう㊷オンとしていて、「厭」オンは慣用音としている。厭離」はエンリ・オンリ、「厭離穢土」はエンリエド・オンリエドと、「エンリ」を第一にしている。

この『大漢語林』は漢和辞書の「厭離」「厭離穢土」の訓みの扱いの変化を示すものと言つてよい。

最後に仏教語辞典を見てみよう。

織田得能『補訂仏教大辞典』(大倉書店 一九一七年)は「エ  
ンリ(厭離)」の出典に維摩經・仏国品・唯識論、六をあげ「厭  
離穢土」の出典に往生要集をあげている。が、オンリ・オンリ  
エドはとりあげず言及もしていない。

中村元『仏教語大辞典』(東京書籍 一九七七年)では、「厭  
離(えんり)」で見出しを立て、解説に「おんり」ともよむ。「厭  
離穢土(えんりえど)」解説中に「おんりえど」ともよむ。と  
する。

中村元他『岩波仏教辞典』(一九八九年)は、「厭離(えんり)」  
に「(おんり)とも読む」とし「厭離(おんり)」は見出しで「↓  
厭離えんり」としている。

岩本裕『日本仏教語辞典』(平凡社 一九八八年)では、「厭  
離(えんり)」の解説中に「おんり」とも読む、とする。

石田瑞磨氏の近著『例文仏教語大辞典』(小学館 一九九七  
年)は、問題を含んでいるので、検討してみよう。

石田氏は、「えんりえど」の項で、「(おんりえどとも)としな

から、例文に『往生要集上序』を示している。岩波文庫本『往  
生要集』で「厭離穢土」とした訓みを改められたのであろうか。  
そして、「おんりえど こんぐじょうど」を見出しとして立て、  
そこでは「えんりえど こんぐじょうど に同じ」としつつ、例  
文に、『一遍上人語録 上 消息法語』の「厭離穢土欣求浄土  
のころさしあらん人はわが機の信不信浄不浄有罪無罪を論ぜ  
ず」を掲げている。このことは、言うまでもなく、『一遍上人  
語録』の「厭離穢土」が「おんりえど」と読まれていることを  
示している。

『一遍上人語録』は、大橋俊雄氏によって日本思想大系『法  
然 一遍』(岩波書店)、また、岩波文庫『一遍上人語録』に翻  
刻されている。凡例に「本書の本文は『一遍上人語録』(文化  
八年版本)をできるだけものと姿を残すように翻刻した」とあ  
る。その本文は、

厭離穢土欣求浄土のころさしあらん人は、わが機の信不  
信、浄不浄、有罪無罪を論ぜず

と、確かに「厭離穢土 欣求浄土」と訓まれているが、ふりが  
なは現代仮名遣である。念のために、国会図書館蔵『一遍上人  
語録』(文化八年辛未冬十月の奥書、江戸浅草日輪寺境内 藤  
澤山学寮蔵版)刊本を調べてみると、同書は、漢字ひらがなで

書かれているが、句読点、濁点はなく、漢字にふりがなもない。問題の箇所は、「厭離穢土欣求淨土のころろさしあらん人はわが機<sup>あはれ</sup>の信不淨不淨有罪無罪をせず」と書かれている。「おんりえど」は大橋俊雄氏の訓みであって、江戸時代の「一遍上人語録」の訓みの証拠とはならないものである。石田氏がこの用例を、仮に、日本思想大系『法然 一遍』から採取されたとしたら、それは、歴史的に確実な訓みとはし難いものであることになる。

が、この例は、仏教方面で、宗派による相違はあろうが、「おんり」「おんりえど」の訓みがかかり広まっていることを推測させるものである。

法華経普及会の井上四郎『訓釈法華経并開結』（平楽寺書店版 一九九一年）も、「疾く<sup>あせ</sup>厭離<sup>あな</sup>の心を生ずべし」と訓んでいる。しかし、島地大等『<sup>対照</sup>妙法蓮華経』（明治書院 一九一四年）は「疾生<sup>しつせう</sup>厭離<sup>あな</sup>心 疾く<sup>あせ</sup>厭離<sup>あな</sup>の心を生ずべし」と訓んでいる。この「和訓は古来慈覚大師の点訓と伝ふるものによる」とある。大正時代初年頃は、「えんり」が普通の訓みであったと思われるが、昭和時代前期になると、「おんり」「おんりえど」が広まったように思われる。

### 三 結論

「厭離」「厭離穢土」は「えんり」「えんりえど」と訓むのが歴史的に正しい訓みであり、これを「おんり」「おんりえど」と読むのは、近代の「厭」の呉音を「オン」とし、仏教語は呉音で訓まねばならないとの考え方から出てきた訓みである。この訓みは、昭和時代にかかり広まった。現在でも、漢和辞典では、「えんり」よりも「おんり」「えんりえど」よりも「おんりえど」の方が正しい訓みであるかのような印象を与えている。我々は、仏教語は特殊な読み方をするという先入観を持っているので、論文などに「厭離穢土」とわざわざふりがなを付けられると、それが古来からの訓みであったかと錯覚しがちである。が、本稿に考察してきた如く、それは近代の訓みであって、我々の祖先が訓んできたという歴史的根拠も伝統も持たないものである。

こうした「おんりえど」「おんり」という、いわば似非読み<sup>しへいよみ</sup>の訓みが誰によって、また、どういう契機で広まったかを明らかにすることは、近代仏教語・漢語の訓みの研究における今後の新たな一課題である。

なお、「厭」を「おん」と訓むことをはっきり誤りとして  
いる辞書に、大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』  
(一九七四年)がある。

△「厭」の字音はエム。これをオンと読むのは、「遠」な  
どにエン・ラン両形あるのに引かれた誤り。  
としている。

有賀有延編著『仏教語読み方辞典』(国書刊行会 一九八九  
年 縮刷版一九九一年)には、「厭離穢土えんりえど」の項に、  
[厭は穢部のエンに読む。穢は呉音エ(え)、土を下と読  
むは慣用音である。  
とある。

『往生要集』の訓みについても、『NHK 二ころをよむ 往  
生要集』(一九八八年)『講師石上善應』では、「厭離穢土」穢  
土を厭離する」と訓まれている。

今後は、こうした正しい訓みが普及するものと思う。

追記。京都嵯峨野に、「厭離庵」がある。「えんりあん」と言い、  
臨濟宗天龍寺派の尼寺であるが、庵主の方の話では、「えんり  
あん」と称しているが、「おんりえど こんぐじょうど」に由  
来するから正しくは「おんりあん」でしよう」ということであ

った。このように現代では「厭離穢土」の宗派による訓みの違  
いが生じているために、根が深いことを感じさせられた。(一  
九九九年一〇月五日)